

神は心を見られる

（ルカによる福音書16：14～18、サムエル記上16：5b～13）

今朝は、ルカによる福音書16章14節から18節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「律法と神の国」と言う小見出しがついた個所が説教のテキストになります。この個所は、こう書き出されています。「金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った」と。「この一部始終」とは、16章1節から始まった、『不正な管理人』のたとえであって、それは、「神と富とに仕えることはできない」と言う言葉をもって締め括られていました。16章は、本来、主イエスが弟子たちに対して語られた譬え話だったのですが（16：1参照）、15章の続きで（15：2参照）、まだそこには、幾人かのファリサイ派の人々が、残っていたのでしょう。彼らは、耳をそばだて、主イエスが弟子たちになさる話を聞いているうちに、次第に、皮肉な笑いを浮かべ始め、「何と馬鹿なことを言う男か」と言った風に、主イエスをあざ笑ったのです。彼らのことを、ここでルカは、殊更に、「金に執着するファリサイ派の人々」と、説明しています。「金に執着する」とは、原語では“フィラルグロス”と言い、その本来の意味は、そのものずばり、“金銭を愛する”と言うことです。なぜ彼らが、主イエスの話を聞いて、皮肉な笑いを浮かべ、あざ笑ったのか、と言うと、彼らにとって富とは、言わば、彼らの善行に対する神からのご褒美で、大いに誇ってよいものだったからです。彼らは、実に単純に、律法に適う善い行いをすれば、良い報いを受け、律法に反する悪い行いをすれば、悪い報いを受ける、と言う、伝統的な因果応報説を信じていましたから、富みを得ることは、外ならない、それは善行の結果だ、と考えていました。だから、彼らにとって、神と富とは相反するものではなく、寧ろ、富みを持つことは、善行の証明とさえなったのです。それを主イエスは、あたかも相反するもののように弟子らに教え、富みの危険性を、殊更に強調するのですから、彼らは、「イエスと言う男は、何と馬鹿な教えを垂れることか」と、冷笑したのです。でも、彼らの尤もらしい理屈の底には、富に対する飽くことのない執着、正に、金銭をこよなく愛する心が潜んでいたのです。それは、彼らがどう取り繕おうと、人々の前に自分を良く見せたいと言う、度し難い俗物根性が、自ずから、証明して、見せていました。金銭欲も、人に善く見せたいと言う偽善性も、根っこは同じで、言わば、同根の、双生児なのです。そこで、主イエスは言われました。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたがたの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」と。

今日は、聖書朗読の折り、旧約聖書からはサムエル記上16章5節の後半から13節までが読まれました。あそこには、ダビデが、サウル王の後継者として選ばれる際の、詳しい経緯が述べられていました。しかるべき人物を選定、選出し、油を注ぐ務めを神より託されたサムエルは、目星をつけ、エッサイの家を訪ねます。エッサイには7人の息子がいました。最初に、長男のエリアブを見た時、サムエルは、彼こそは、主なる神が、イスラエルの次期王に選び出そうとしておられる人物ではないか、と、早合点するのですが、そうではありませんでした。エッサイの息子らを、上から順番に面接し、次こそは、次こそは、と考えるのですが、結局は、全部駄目で、その時たまたま、野原で羊を飼っていて、そこには居合わせなかった、一番下のダビデが、急遽、呼び出され、まだ、その時少年だ

った彼が、選出されることになり、王となるべきしるしに、油が注がれることになるのですが、こうしたことが起こる間に、厳密に言えば、長男のエリアブを見た直後のことでしたが、主なる神が、サムエルに言われた、印象深い言葉が、7節に出て来ました。それは、こうでした。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見ようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」。以前、私たちが用いていた口語訳聖書では、最後の部分は、「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」、と訳されていました。こちらの方が、よく馴染むのではないのでしょうか。幾ら表面を取り繕っても、心を見られる神を前にしては、一切は無駄、何の意味も持たないのです。だから、ファリサイ派の人々の生き方は、如何に巧妙に振る舞おうと、実を結ばないのです。彼らだけに限らず、人間にとって、何より大切なのは、真実です。真です。父なる神ではなく、神の御子イエス・キリストに関することなのですが、ヨハネによる福音書1章43節以下に、後に、12使徒の一人になるナタナエルのことが出て来ます。彼は、友人フィリポからナザレのイエスについて紹介を受けるのですが、その時、彼は、即座に、「ナザレから何か良いものがでるだろうか」と、半ば、蔑むような、疑いを込めた返答を返すのです。しかし、そんな彼に対して、主イエスの方は、彼を御覧になるや、すぐさま、その本質を見抜き、「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い」と、言われました。主イエスも、また、父なる神、同様、人を見る際、外側ではなく、心を見られるのです。人の目ではなく、神の目、キリストの目に、どう映るか、私たちが常に心掛けるべきは、これです。

次に、主イエスは、16節で、こう言われました。「律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている」と。マルコによる福音書1章15節によると、主イエスによるガリラヤ伝道での第一声は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」でした。「律法と預言者」とは、旧約時代を象徴する言葉で、旧約の時代、律法と預言者によって予告されていた神の国は、遂に、メシアである私、イエス・キリストの到来によって始まった。だから、悔い改めて、即ち、方向転換をして、これを受け入れ、神の国の民となりなさい、と主イエスは呼びかけ、彼の許に来る者を、誰をも拒まず、受け入れられたのです。神の国とは、地上に定まった領土があるわけではなく、世界のどこにでも及ぶ、神の愛の御支配のことで、これに与るには、何の条件もなく、幼子の如く、ただ謙って、素直に、それを受け入れさえすれば、それでよいので、だから、貧しい者、罪ある者、遊女、取税人らは、喜んで、これに応じたのです。ここに、実に、不思議な言葉、「だれもが力づくでそこに入ろうとしている」と言う言葉が出て来ます。口語訳聖書では、「人々は皆これに突入している」と訳されていました。原語は“ピアゾー”で、“ピア”とは“暴力”のこと、その動詞形ですから、その意味は、“暴力を用いる”、“暴力で押し入る”、となり、口語訳聖書では“突入”、新共同訳聖書では“力づく”と訳しているのです。一体、それは何を指しているのでしょうか。確かに、熱心党は、暴力でローマ帝国に立ち向かい、独立を勝ち取り、神の国を地上に実現することを目指しました。でも、主イエスは、マタイによる福音書26章52節で、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」と、勇み立つ弟子らを窘（たしな）められました。だから、熱心党的な暴力は、ここでは考えられません。今でもそうですが、信仰を持つとする時、様々な障害が立ちはだかります。特に、迫害が予想されたこの時代には、尚更のことで、戦いなしには、中々決断はしかねました。“力づく”とは、このことを指すとも、考えられなくもありません。しかし、それよりも、この時、実際に、主イエスの許には、この有難い福音に、罪人、遊女、徴税人等、言わば、こ

の世から弾かれた人々が殺到し、我先にと、神の国に入ろうとしていましたが、その様は、決してお行儀の良いものとは言えず、見る人が見れば、それは乱暴とも、強引とも見え、それを、ここでは、“力づく”とか、“突入”とか、まるで暴力を揮っているかのように表現したと考えるのが、一番妥当なのではないでしょうか。これを、冷ややかに見ていたのが、ファリサイ派の人々で、一部の例外はあったものの、彼らの大方は、何を寝ぼけたことを、と言った態度で、この状況を眺めていたのです。否、眺めると言った穏やかな態度ではなく、これでは律法が蔑にされ、尊いユダヤの伝統が損なわれてしまう、と、彼らは、大いなる危惧を感じ、一時も早く、対処せねば、と焦り、イエスに対する反感を、いやが上にも募らせ、一段と強い殺意を抱くに至ったのです。では一体、主イエスは、彼らが心配したように、律法は最早時代遅れ、今やこれは、廃棄すべきもの、と、本当に考えられたのでしょうか。それは、大いなる誤解であって、主イエスには、そんなお考えは微塵もなかったのです。主イエスは、ファリサイ派の誤解を打ち消すために、17節で、こう言われました。

「しかし、律法の文字の一点一画がなくなるよりも、天地の消え失せる方が易しい」と。マタイによる福音書5章17節以下に、これをもっと詳しく述べた文章が出て来ます。少し長いですが、こちらの方が、主イエスの律法に対するお考えがよく分かりますから、読んでみたいと思います。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消え失せるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするようにと人に教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」。律法とは、本来は、モーセの十戒を中心とした、旧約聖書の各所に散在して出て来る神の戒めのことで、全部で613あると言われます。が、しかし、時代の変化に伴い、時代に合わせ、これらを解釈し直し、新しく作られた細則をも含めて、一般には、律法と呼ぶのですが、要するに、神の戒め、を言うのです。主イエスは、戒めが持つ本来の精神を忘れ、徒に、文字に拘泥し、形骸化した、所謂、律法主義には、断固反対されました。が、律法そのものが持つ、本来の精神は、どこまでも重んじ、その意味で、律法を大切にされました。主イエスのなされたのは、律法の廃棄ではなく、寧ろ、成就だったのです。何故なら、キリストによって罪赦された者は、嫌々、渋々、神の戒めに従うのではなく、寧ろ、これを慕い、喜び、感謝して、自ら進んで、これに従おうとするからです。そのことによって、律法本来の精神は取り戻され、満たされることになるからです。更には、罪の赦しには、聖霊が伴い、聖霊が働いて、良き実を結ばせてくださるのですから、実を結ぶ確かさは、最初から保証されているのです。主イエスは、そこまでを見越して、「私が来たのは律法を成就するためだ」と、言われたのです。

そうすると、律法を重んじているようで、実際には軽んじているのは、ファリサイ派の人々の方だ、と言うことになります。その実例として、主イエスは、離縁に関する律法と、これを巡る彼らの態度について語られます。18節を読んでみましょう。「妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる」。申命記24章1節以下に、離縁に関する律法が記されています。男尊女卑の当時、離縁ができたのは、夫の側だけでしたが、律法は、夫の好き勝手を防ぐため、離縁をしてもよいが、その場合は、きちんと離縁状を書いて妻を解放してやり、

以後、夫側から、あれこれいちゃもんをつけられないように、また、当時、女性には、再婚の道しか生きる道はありませんでしたから、再婚しやすいように、きちんと離婚したことを証明する離縁状を手渡すべき義務を、律法は、夫に負わせたのです。今から見れば、断然男性優位の掟ですが、それでも、女性の弱い立場を少しでも守ろうとする意図で、この律法は定められたのです。本来の趣旨は、そこにあったのですが、離縁状さえ渡せば、それでよいのだ、とばかり、この律法を逆手にとって、彼らファリサイ派の者らは、好き勝手に振る舞い、気が変わったから、気に入らない点が見つかったから、と、言いがかりをつけて、簡単に、妻を離縁していたのでしょう。でも、主イエスは言われるのです。本来、夫婦とはそんなものではない。創世記2章24節には、人間が創造された当初から、「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」とあり、本来夫婦は、神が合わされたものなのだから、自分の都合や、気まぐれで、簡単に離縁することは許されない。自分は、別れたつもりでも、神はそれをお許しにならないとすれば、依然と夫婦関係は続いているのだから、その状態で他の女性を妻とすれば、それは即ち姦通の罪を犯すことになり、また、そうして離縁された女性を妻とする者も、姦通の罪を犯すことになる、と、主イエスは、そう言われるのです。ここに出て来るファリサイ派の者たちだけに限らず、律法を重んじているようでありながら、実際には、単に、利用しているに過ぎない、或いは、自己を正当化するための防具として用いているに過ぎない、とすることは、往々に起こることです。

マルティン・ルターの言葉に、「聖書は、レーゼ・ボルト（読む言葉）ではなく、レーベ・ボルト（生きる言葉）だ」と言うのがあります。これに倣って言えば、「律法は、利用すべきものではなく、聞き従うべきものだ」と、言うことができるのではないのでしょうか。利用すれば、それは悪魔の言葉になり、聞き従えば、それは神の言葉になる、と、そう言ってよいかも知れません。

私たち、ファリサイ派の者たちを笑うのではなく、我が身を省み、これを、他山の石と致したく思います。

(三輪恭嗣)